

〔資料紹介〕

「マルタ事情」について

清水廣一郎

シチリアの南九〇キロ、リビアのトリポリまで三二〇キロの位置にあるマルタは、まさにヨーロッパとアフリカの接点である。この島は、つねに地理的にもっとも近いシチリアの影響下にあり、フェニキア、カルタゴの時代からほぼその歴史をともにして来た。しかし、九世紀中葉に始まるアラブの支配が、一〇九一年にノルマンのルッジェーロの征服によって終結した後にも、その影響は存在し続けた。ホーエンシュタウフェン家のフリードリヒ二世の治下で最終的にイスラム教徒の追放や改宗の強制が行なわれたと伝えられているが（一二二四年ごろ）、その後も人びとの間でアラブ系の言語が話されており、やがてマルタ語として定着することになった。この点ではアラブ系の言語が完全に消滅してしまったシチリアとは異なり、文化の基層において地中海南岸とのつながりを維持し続けているのである。この島の資源や人口の乏しさ、シチリアからの距離などのために、シチリアの影響が生活のあらゆる面を支配するという事態が生じなかったともいえよう。古代以来の地中海航路も、

メッシーナ海峡を通るものが普通であり、シチリアの南側、とくにマルタ寄りの海域を通るものはまれだったのである。また、マルタは、同じような位置にあるパンテッレリア島におけるぶどう酒のような特産物に恵まれず（木綿はやや有名であるが）、地中海貿易に積極的に関わる条件を欠いていた。

このように、シチリアの付属物として影の薄い存在であったマルタの歴史に大きな転換が生じたのは、いうまでもなく一五三〇年のイェルサレムの聖ヨハネ騎士団（ロードス騎士団）の入住であった。一五二三年にトルコの攻囲によって本拠地ロードスを追われた騎士団は、新たな拠点を求めるべく努力したが、フランスとスペインの抗争の中にあつてなかなか好適な土地が得られなかった。ようやくカール五世によって騎士団のマルタ領有が認められ、この島に移住したのが一五三〇年なのである。もっとも、騎士団側はこの荒涼とした島に満足できず、仮の拠点と考えていたようであるが、結局、一七九八年のナポレオンの征服に至るまでここに留ることになった。

騎士団の入住によって、マルタはいやおうなく地中海における軍事的対決の中に投げ出された。オスマン・トルコに対するカトリック側の最前線ということになったのである。また、ローマとのつながりも、騎士たちの出身地であるヨーロッパ各地とのつながりも強化され、この眇たる孤島はヨーロッパの国際政治の網の目からみ取られてしまった。こうしてマルタは、一五五一年のトルコ人の侵攻と六五年五月から九月にいたるいわゆる「大攻囲」を経験しなければならなかったのである。

それにしても、マルタはカトリック世界の辺境に位置する小島であり、騎士団の上位者であるローマ教皇庁にとっても、その実態を適確に把握することはきわめて困難であった。情報がきわめて乏しかったからである。このような必要から *Discorso di Malta*, *Relazione di Malta*, *Descrizione di Malta* などと称する一連の文書が作成されることになった。これらは、いずれも外部へ対してマルタの事情を伝えようとするものであるので、ここでは一括して「マルタ事情」と訳しておく。これらは、いずれも短いものであるが、マルタの風土、歴史、経済、宗教事情などに関するきわめて貴重な史料である。これらのうちの一つは、やがて騎士団の副書記官長 Gian Francesco Abela に よって利用され、大著 *Descrizione di Malta, isola nel mare siciliano*, Malta 1647. としてまとめ上げられることになる。⁽¹⁾ ここにはじめてマルタ歴史学が誕生する訳であるが、前述の「マルタ事情」は、まさにその先駆をなしたのである。キケロ (*Actio in verum*, 2, 4, 46, § 103) や プリニウス (*Historia naturalis*, 3, 8, 14, § 92) のような古代の著作家の作品を別にすれば、これらの「マルタ事情」は、この島に関する記述史料として特に古いものである。⁽²⁾

私は「地中海の島嶼における文化交流の影響」に関する現地調査の一環として、マルタおよびローマにおいて史料調査を試みたが、ここではアペーラの大著が刊行される以前に執筆されたと思われる「マルタ事情」五篇を取り上げて、それらの特徴を概観することにした。そして、この作業がわれわれのマル

タ研究の最初の手懸りになることを期待したいと思う。なお、これらの史料は、騎士団文書の大部分と同じく、マルタにおける「公用語」であったイタリア語で書かれている。⁽³⁾

① *Discorso di Malta di Pietro Dusina*.

これは、一五七四年にローマ教皇庁からマルタに派遣された教皇特派巡察使 (*Visitor apostolicus*) Pietro Dusina (*Duzina*) の報告である。ユニバースクリプトは *Biblioteca Apostolica Vaticana* (BAV), Ms. Vat. Lat. 13411. 447 の *Royal Malta Library* (RML), Ms. 433. 288 である。前者は *Manuscript* A. P. Vella, *La missione di Pietro Dusina a Malta nel 1574*, *Malta Historica*, vol. 5, n. 2 (1969). にある。

この時代のマルタは「大攻囲」から一〇年、ヨーロッパ各地から寄せられた援助による新首都ヴァレッタ (一五六六年着工) の建設もほぼ完成し、騎士団本部の移転も行なわれていた。首都建設のために多数の労働者が外部 (多くシチリア) から移入されたほかに、富と成功を求めてやって来る冒険者たちも増大した。このような外面的繁栄の背後にあって、騎士の墮落 (一五五〇年代からマルタは売春婦で有名であった)、内部対立、権力闘争などが頻発していたし、枢機卿と同格であることを主張している騎士団長とマルタ司教との対立も激化していた。さらに、ドイツ系の騎士を通じてルター派の影響がこの島にも入って来ていた。このような状況を憂慮した教皇庁は、有

能な教皇庁官僚であるビエトロ・ドゥッジーナを派遣してマルタの宗教事情についての調査を行なわせた。

一五七四年八月にマルタに到着したドゥッジーナは、翌年一月二日から教皇特派巡察 *Vista apostolica* を開始し、約二カ月間でマルタ島、ゴゾ島の全教会および礼拝堂四三〇を实地に調査した。この調査は、教会の活動、建築、経済状態、聖職者の資格などから、場合によっては教区の人口や経済にまで及ぶ広範なものである。ドゥッジーナは教会を訪問すると、その地域の聖職者全員を集めて口頭試問を行ない、データを収集したのである。二カ月間にわたりこのような密度の濃い巡察を施行したその精力には感嘆せざるを得ない。その記録は、*RML, Ms. 139, Ms. 643 および Ms. 1239* にある。

この巡察は、もとよりマルタだけの孤立的現象ではなく、トレント公会議以後の教皇の主導による改革というカトリック・ヨーロッパ全体の状況の中に位置づけられるものである。教皇庁は、この巡察の結果、マルタに異端審問官 *Inquisitor* を常駐させる必要を認め、ドゥッジーナ自身が初代の審問官となった。こうして、マルタと教皇庁との関係は、さらに緊密となったのである。

前述の *Discorso di Malta* は、ドゥッジーナが巡察をもとに簡潔にまとめあげた「報告」である。「イェルサレムの聖ヨハネ騎士団について」と「マルタ島について」の二部から成っている。前者は、騎士団の歴史、機構、構成員の人数などについて簡単な説明を行なっているが、「騎士はきわめて怠惰に暮し

ており、文武いずれについてもなら訓練をしていない。」というような批判的な語句も見られる。後者は「マルタないしメリタと呼ばれる島は、シチリアから六〇マイル離れているだけなので、二百マイル以上離れているアフリカよりは、イタリアに属しているといえる。」という言葉から始まって、気候、地理、騎士団入住以前の簡単な歴史などが説明されている。たとえば、島は岩だらけで、畑がみな小さいこと、良質の麻、木綿、穀物を産するが、食料が自給できずシチリアから輸入すること、住民はつねにトルコ人の襲撃を怖れているために、それほど農作業に熱心ではないこと、その言語は古代カルタゴ人のそれであることなどが述べられている。住民は困難に耐えるが、その反面、なんらのデリカシーもなく生活しているという記述もある。ローマから来た高位聖職者の眼には粗野以外のなものにも映らなかったであろう。人口については、次の数字が挙げられている。

村落 (*casale*) 三三
 教区 八
 役に立つ人数 (おそらく武器を取り得る男子) 一万
 役に立たない人数 一万四千

その他ゴゾ島に (役に立つ人) 計二万四千
 () 役に立たない人 三千
 役番および馬 四千
 その他、小麦、大麦、茴香、木綿の生産量についても触れられ

ている。

この史料は、前述の巡察の記録と関連させることによって、利用価値が非常に高まると考えられる。

② Relazione dell'isola di Malta.

この文書は、教皇レオリウス三世によってマルタに派遣された聖庁控訴院 (Rota) 判事 Gaspare Viscconti の秘書 Giovanni Battista Leoni が執筆した報告書である。レオニのマルタ滞在は八一年秋から八二年春までであるので、執筆はこの時期以降ということになる。この文書の写本は、マルタ、ローマ、その他ヨーロッパ各地の図書館に散在している。RML. Ms. 1306; Biblioteca Angelica di Roma, it. 1479. (ハンティン＝P. Falcone, Una "Relazione di Malta sulla fine del Cinquecento", *Archivio Storico di Malta*, Anno IV, vol. IV (1933); BAV, Trivulziano 1467. (ハンティン＝C. A. Vianello. Una relazione inedita di Malta del 1582, *Arch. St. di Malta*, Anno VII, vol. III (1936)). などが主なものであろう。

この一五八一年は、騎士団内部でクーデターが突発した年である。オーベルニュ出身の騎士団長 Levesque de la Castière は信仰心にあつい人物であったが、圧制的で厳しい性格であったため、一部の騎士たちの強い反発を買っていた。かれがヴァレットの町から売春婦を追放する措置を強行し、しかも若干の有力者や友人につながる者については手心を加えた

のをきっかけとして、大評議会はドゥ・ラ・カッシェールが實際上引退し、団長代理を置くことを要求した。そして、団長がこれを拒否するや、かれを捕え、投獄してしまったのである。実はこの背後には騎士団内部におけるオーベルニュ、プロヴァンス、フランス側と、アラゴン、カステイリア、ドイツ、イタリア側との対立が存在した。つまり、ヨーロッパ全土を舞台としてくり上げられていたヴァロアとハプスブルクとの抗争が、ここに反映しているのである。両派の宣伝戦がローマで展開され、結局、ドゥ・ラ・カッシェールも反対側もローマに召喚され、裁判が行なわれることになった。つまり、本報告は、この裁判の準備のために教皇が行なった情報収集活動の一環をなしているのである。

この報告は、ピエトロ・ドゥジナーのものよりも詳細であるが、スタイルは大変に似通っている。その内容は、(一)地理的な記述、(二)住民の人口上、経済上の状態、(三)騎士団へのマルタの寄進の歴史、(四)騎士団の歴史と現状、(五)騎士団長の選出方法、に大別される。たとえば、(二)については次のような記述が見られる。

住宅はすべて貧しく粗野である。言葉はアラビア語で、他の言葉を理解する者は少ない。大部分は、混ぜものをしたパンと野菜と乳製品を食べ、水を飲んでいる。そして、薪がないので牛のふんを燃している。新首都の建設の際には多数雇傭されて労働に従事したが、現在は職もなく貧困の中にある。収入六百スクードに達する一〇家、二百スクードの五〇家は一種の品位

をもって生活しているが、その他はきわめて貧しい。土地が不毛のためとかれらがあまり勤勉でないためである。

これらの住民はきわめて信心深く、教会に通い、聖職者を尊敬する。そして、できる限り寄捨を行なおうとする。その結果、島には多数の教会がある。この島の三分の一は教会領であるといわれているが、それも十分にうなずける。食糧の自給はできないために、シチリアから多量の穀物を輸入する。それも不足になると、騎士団のガレー船が出勤し、穀物を積んだ船を発見すると、その売却を強要する。この活動によって、騎士団は大きな利益をあげている。その他、シチリアからぶどう酒や肉その他の食料、スペインから織物、ヴェネツィアから木材、フランスから金属を輸入する……。

文書の性質上、騎士団の構成や騎士団長の選出方法については、さらに詳しく記述されている。

③ Descrizione dell' isola di Malta.

前述の二つの「マルタ事情」が教皇庁から派遣された官僚による調査報告であったのに対し、次の二つはマルタ人によって書かれたものである点に特徴がある。

この③の手写本は RML. Ms. 631. として保存されている。

今の所、エディションも研究も発表されていない。中の記述から執筆年代は一六一〇年以降、筆者は騎士団に勤務する医師と推定される。実務的な文書とは違って、神話・伝説を数多く引用している点の特徴である。ストラボン、プリニウス、キケロ、

ヴィルギリウス、エウセビオスなどの引用が、時にラテン語で行なわれていることは、著者がかなりの教養を身につけていたことを物語っている。

内容的には、(一)地理的な記述、(二)パウロのマルタ滞在、(三)パウロの「聖跡」を庵とした隠者の事跡に分けられる。「われわれマルタ人」という表現 (τοῖς) が存在するが、全体としてマルタについての愛着と誇りが示されている事が大きな特徴といえるだろう。たとえば、産物についても、広さの割には穀物や野菜などを豊富に産出していると述べているし、羊毛はスペイン産に匹敵し、地中海のどこにもないような薬草が採れ、果物はイタリヤ産のものをしのでいるというように、自然の恵みを受けていることを強調している。また、マルタ人の勇氣、困難に耐える資質、高い能力、相互に尊重し合うことなども述べられている。ところで、マルタ人が誇りとするものの中でも最も重要なのは、パウロがこの島に漂着し、奇蹟を行なって住民を改宗させたこと(使徒行伝二八章)であった。著者は、エウセビオスやインドールスを引用してこの伝承について論じている。また、マルタ騎士団に入ろうとしたスペイン貴族が隠者となり、かつてパウロの泊った洞窟を重要な巡礼地にした事跡に多くのページをさいている。

この著作が成立した状況については不詳であるが、マルタ人の自己主張がパウロ伝説に結びついていた事は注目される。

④ Relazione [sopra lo stato, dazii ed altre notizie curiose

dell'isola di Malta.)

RML, Ms. 5; Cathedral Museum Mdina, Cathedral Archives, Ms. 59. として保存されているこの文書については、短文ながら G. Wettinger Early Maltese Popular Attitudes to the Government of the Order of St. John, *Malta History*, vol. VI, n. 3 (1974). の優れた研究がある。この文書は、マルタ出身の聖職者・教師であった Dun Filippo Borg によって、一六三三年から一六三六年までの間に異端審問官あるいはマルタ司教への「報告」として書かれた。この時代は、

やがて Floriana として知られるようになる新街区を囲い込むために巨大な城壁建造の作業が行なわれ、住民は重税にあえいでいた。やがて住民は自分達が騎士団入住以前には免税特権を享受していたことを主張して運動を起し、一六三八年に至ると、騎士団長の悪政をかつての君主マクドナルド王へ訴えるまでに至った。このような状況の中で、ドゥン・フィリップは「シチリアの晩鐘」事件以後のマルタの歴史をふりかえり、この「報告」を執筆したのである。③の著者は、パウロ伝説や隠者の事跡に託してマルタ人としての自己主張を行なったと考えられるが、ドゥン・フィリップの場合には、とくに税制を中心としてマルタ人の騎士団支配に対する反発が表明されている。とくに Valletta (1557—58), Verdala (1581—95), Paola (1623—36) の三名の騎士団長が税負担を増大させたとして非難の対象となった。“Erasmus innuit, Lutherus irrit, Erasmus part ova, Lutherus excludit pullos” (エラスムスが合図をしてルター

が侵入した。エラスムスが卵を生んでルターが鶏にかえした。) を引用して “Valletta innuit, Verda la annuit, Paola irrit et excludit pullos” (ヴァレットタが合図をしてヴェルダールがこれを受け、パウラが侵入して鶏をかえした) と述べている所は、はなはだ興味深い。マルタにおける政治的指導者として在俗聖職者層が重要な役割を果たすようになっていたことも見逃せない。

④ Descrizione dell'isola di Malta.

この文書は Archivio Segreto Vaticano, Misc. Arm. II, 81 (cc. 256v.—260r.) として保存されている。管見の及ぶかぎり、これまでこの文書が存在を報告した例は存在しない。これは、Dialogo del R. Sig. Commendatore Hierosolimitano Fra Josef Cambiano Piemontese, Ambasciatore a Roma, dove si ragiona d'alcune cose degne di memoria della Religione dell'Hospitale di S. Giovanni di Hierusalem…… という長大な対話篇の後に続けて書かれている。書き出しはドゥッジーナの報告に良く似ているが、騎士団の機構や騎士団長の権限の問題には全く触れず、この島の地理や伝説の記述に終始している。住民に関する記述もかならずしも多くない。したがって、社会的な視点からすれば、史料的价值はそれほど高いとはいえないということになる。注目されるのは、新首都ヴァレットタに関する言及が全くなく、騎士団長の居所として Castel Sant'Angelo があげられていることである。これは、この文

書が一五七一年の新首都移転以前に執筆されたことを示している。とすると、これまで取上げたもの「マルタ事情」よりも古いことになる。十六世紀のマルタに関する史料がきわめて乏しいことを考えれば、この文書も重要な意義を持つと考えられる。前述の「対話篇」との関連においてこんど検討したいと思っ

以上五つの「マルタ報告」を取上げて、それぞれの特徴について概観して来た。見落しはあるであろうが、アムレーアの大著(一六四七年)以前の主要なものは網羅したつもりである。カトリック世界の辺境、トルロに対する最前線に位置し、騎士団という団体的君主に属しているマルタは、きわめて特異な存在であった。地中海の孤島として他の地域から隔離した環境でありながら、教皇やかつての君主たるヌンイン王との間に固有のつながりを持ち、さらには個々の騎士を通じてヨーロッパ各地との連絡を保ち続けたこの島の歴史は、近代ヨーロッパのそれと逆に照したるものといえなからうか。

(一) ニューマンの『*Gian Francesco Abela: Essays in his Honour by Members of the "Malta Historical Society"*』, Malta 1961. がある。

本稿では紙幅の関係で文献の引用はほとんど行なえなかつた。マルタ史の現状については A. T. Luttrell (ed.), *Medieval Malta. Studies on Malta before the Knights*, London 1975; A. Williams and R. V. Bonavita (ed.),

Maltese History: What Future, Malta 1974; M. Vassallo (ed.), *Contributions to Mediterranean Studies*, Malta 1977. を参照。雑誌として *Malta Historical Review* がある。

(2) これ以前のマルタ語の類語記号 J. Quinlin, *Insulae Melitae Descriptio*, Lyons 1536. がある。

(3) 文字に書かれたマルタ語としては、一六七〇年代の詩があるものと古く。これは最近になって公証入文書の間から発見されたものがある。G. Wetinger and M. Fsadni, *Peter Caxaro's Cantilena. A Poem in medieval Maltese*, Malta 1968.

(4) この史料については、もろたぬと整理したものと考へられる。

(5) H. P. Scicluna, List of Manuscripts and other Records preserved amongst Various Collections of the "Archivio Apostolico Vaticano" bearing a Special Reference to the Order of St. John of Jerusalem and the Inquisition in Malta, *Bulletin of the Institute of Historical Research, Malta*, n. 4 (1932). 2 Indice No. 675. n. 65. 以下に表題だけをあげておく。これらは、知られる。

(6) この対話篇の存在は E. Michel, I manoscritti della Biblioteca Vaticana relativi alla storia di Malta, *Arch. St. di Malta*, Anno I, Vol. II (1930) に採録されている。

る。ただしBAV. Fondo Urbinate 所蔵の写本であって
ここで取上げたものではない。この史料もこれまでの所全
く研究の対象となっていない。

(広島大学助教授)

* 本稿は昭和五十二年度科学研究費補助金(海外学術調

査—現地調査)「地中海の島嶼における文化交渉の影響」
および昭和五十三年度科学研究費補助金(海外学術調査—
調査総括)地中海島嶼における都市・農村生活の構造の分
析と島嶼及び外部社会の交渉の機構の研究」による研究成
果の一部である。